# W校中高等部だより

# のみの市特集

令和六年（２０２４年）十一月十六日

ニューヨーク補習授業校ウェストチェスター校




十一月十六日に中高等部主催の「のみの市」が開催されました。九月七日に第一回のみの市委員会が開かれ、準備がスタート。生徒会の本年度のテーマ「全心温光」を合言葉に、のみの市委員を中心にしながら、中高等部全員が力いっぱい活動してきました。

今年は、中等部一年生・二年生・三年生・高等部一年生・二年生による五つのグループに分かれてブースを出しました。各学年とも、幼児部初等部向けのゲームコーナー、各家庭から出品していただいたバザーコーナー、保護者の方々によるベーク製品コーナー、そして生徒たちのアイデアを凝らした食べ物コーナーに分かれて出店しました。

九月から始まったのみの市委員会では、最初に収益金の寄付先を検討しました。その結果、収益金は、日本の地震や豪雨被害で被災した「石川県能登町立松波小学校」に寄付することになりました。二か月の取り組みで、各クラスの出し物を決定したり、幼児部初等部向けのゲームを決めたり、各出し物の担当者を決めたりと毎週忙しく準備を重ねてきました。

準備を進める中、出展内容がなかなか決まらなかったり、細かな点で意見が合わないことがあったりといろいろなドラマがありましたが、思いは一つ、できるだけ寄付金を集めようと、「常に全力」で取り組みました。

「のみの市」当日、会場となった大ジムでは、保護者の方々による準備から始まり、十一時半から生徒も合流して、十二時少し前にはすべての準備が整いました。午前十一時四五分に、幼児部のかわいいこどもたちが来場したところから会場内は緊張感が広がり、「のみの市」の雰囲気が高まりました。幼児部のこどもたちは、中高生が優しく教える色々なゲームを楽しんだり、お店の売り物に目を輝かせて買い物をしたりしました。十二時二十分からは六年生と交替。さらに十二時四五分からは、初等部の保護者の方々や児童のみなさん、卒業生などが来場し、一時は身動きが取れないほどの混雑ぶりになりました。すべての生徒が忙しく体を動かし、お客様のために最高の笑顔を作り、「常に全力」で一生懸命頑張っていました。

計画に大きなずれもなく、「のみの市」は無事終了し、保護者のみなさんの助けを借りながら後片付け、そして各クラス会計担当による集計も終了しました。最後に当日の売り上げ総額の集計結果が６３３７ドルと発表され、この金額に生徒たちからは達成感とともに感動の声が上がりました。

「のみの市」当日、また「のみの市」開催に至るまでの過程で色々とご支援いただきました保護者の皆様には心から感謝申し上げます。



## のみの市を終えて考えたこと

中等部一年一組　フェルナンデス　美奈

先々週、初めて運営側として参加したのみの市が無事に終わりました。中等部一年生はかき氷と抹茶ラテを売ることになったのですが、まず最初に思ったことは「どちらも私の好きなものだし、お客さんとして買いたい」ということでした。これまで何度ものみの市を経験しましたが、小学生の間はお客さんとしてただ楽しく買い物やゲームをするお祭りのような日で、特にクレープやお菓子を買うのが一番の楽しみでした。

運営側として一番の学びになったのは準備の大変さです。調べることや決めることが多く、話し合いが本格的に始まったのは二学期に入ってすぐでした。かき氷や抹茶ラテを売るためには何が必要なのか、材料だけでなく容器やスプーンなどもそろえなくてはいけません。しかも、それを決められた予算で買いそろえるということが一番苦労したことです。抹茶ラテを作るには抹茶の粉が必要ですが、抹茶の粉はアメリカではとても高いものです。材料にお金がかかるので、ほかのものでお金を節約しなくてはなりませんでした。私はかき氷の容器を買うことを任されていたのですが、そのためにふた付きの容器を買うつもりだったのを紙製のボウルに変更しなければなりませんでした。このような調整をクラス全体で確認しあって進めるということが何週間も続きました。



そしてもう一つの大きな学びは現場の大変さです。お客さんがたくさん買いにきてくれるのかという心配はすぐに吹き飛びんだのでよかったのですが、とにかく忙しかったです。休む間もなく動いて、お金が入ってくるという感覚はとても新鮮でした。ゲームコーナーの方は忙しいということはなかったですが、遊びにきてくれる幼稚部や低学年の子どもたちがなかなかゲームを理解してくれなかったり、思い通りにゲームを楽しんでくれなかったりで、対応が難しかったです。

お祭りだと思っていたのみの市がこんなふうにできているということ、そしてのみの市の賑わいを支えて、お金を得ることができたことはおおきな学びです。それでもやはり、私はクレープや飲み物やお菓子を好きなように買うのみの市の方が好きです。



## 変わらないもの

中等部一年一組　髙田　夕莉子

私は今米国の学校に通い、毎週土曜日に補習校に通っている。補習校は、授業を通して日本の文化を学ぶ貴重な場所だが、もう一つ特別な意味を持っているのは、ここでできた友達や先生との関わりだ。

この補習校は人の入れ替わりが激しく、私が通い始めた頃に一緒に勉強していた人の中でも会えなくなった人達がいる。補習校は一週間の中のたった数時間しかないが、その中

でも一緒に学ぶことや行事を楽しむ時間が、大切な思い出となる。例えば蚤の市のような行事では、みんなで準備をしたり、打ち合わせをしたりして新鮮な時間を過ごした。そのなかで、友達と過ごした時間が思い出として残る。

だが、毎月のように新しい顔が増え、もともといた人がいなくなり、いつの間にか会えなくなってしまう。そのことについて考える時、私は少し寂しさを感じる。もう会うことはないのかと考えると、不思議な感覚に陥る。しかし私は、どれだけ離れて時間が経っても、その人を忘れなければ思い出も色褪せることないと信じている。補習校で過ごした時間、出会った人、そして一緒に頑張った思い出は、全て私の大切な思い出だ。

先日の蚤の市で、私のクラスはかき氷と抹茶ラテを出した。多くの人に喜んでもらえ、数時間の新鮮な経験をみんなで分かち合うことができた。今年の中一クラス目標である『一期一会』。たとえ長くは続かない関係だとしても、その関係を大切にすることに意味がある。人は変わりゆくものだが、思い出や経験など、変わらないものもあるのではないか。そんな事に気付かされた蚤の市だった。



## のみの市で仲間になれた日

中等部一年一組　瀬来　真弥

補習校で「のみの市」というイベントがありました。中等部一年一組のクラス全員が一つになれた、とても楽しい日でした。補習校は普通の学校と違って土曜日だけしかありません。さらに、みんな普段は別々の現地校に通っているため、会うことはほとんどありません。私自身、補習校から北に車で三十分ほど離れた所に住んでいるので、クラスメートとは週に一回しか会えません。そのため、一組のみんなと仲間になれたと感じたのは、春の球技大会ぐらいでした。

のみの市では、いろいろなことをしました。かき氷や抹茶ラテを作って売ったり、おにぎりやサンドイッチも販売しました。また、初等部の子どもたちのためにゲームコーナーも開きました。クラスメートたちと一緒に計画を立てて準備し、みんなで協力して進めました。はじめは緊張していましたが、一緒に作業するうちに自然と笑顔が増え、お互いのことを少しずつ知ることができました。

補習校には、私のようにアメリカで生まれ育った生徒もいれば、日本から短期間来ている生徒もいます。それぞれの背景や目的が違い、特に国語の授業ではレベルの差を感じることもあります。そのため、普段は本当に分かり合ったり、助け合ったりする機会があまりありませんでした。しかし、のみの市では違いました。かき氷や抹茶ラテを作って売ることに、国語のレベルや漢字の数は関係ありません。ただ、どうやったらお客さんに喜んでもらえるかを考え、一緒に行動するだけでした。



　このイベントを通じて、クラスのみんなと心から仲良くなれた気がします。補習校で過ごす土曜日が、今までよりもっと楽しみになりました。そして、みんなで一つのことをやり遂げる楽しさを知り、これからも協力していろいろなことに挑戦したいと思いました。この経験は、私にとってとても大切な思い出になりました。

## のみの市

中等部二年一組　　中野　幸司

　今回ののみの市は売る方で二回目です。中二のクラスのゲームはカップポングで食べ物はベーク品でした。
　僕はのみの市の売る方が好きです。けれど、いろんな準備が必要でした。僕がのみの市委員だったから、数週間に一回のみの市委員会にでなければいけませんでした。僕はめんどくさがっていましたが、のみの市のことで大切なことを言っていたから、ちゃんとメモをしていました。
　のみの市の日は、大成功でした。全クラスで六千ドル以上かせぎました。中二のベーク品は売切れました。カップポングもかなり楽しんでいた人もいました。僕は買いたかった物があったけれど、休みの前にとられました。
　今回ののみの市は前のよりずっとよかったです。また来年もいいのみの市になるといいです。





## 蚤の市感想文

中等部二年一組　　酒井　祐豪

　今年の蚤の市を振り返ってみると、たくさんのことを学びながら楽しめたと感じます。
　蚤の市は、みんなと協力して達成する行事です。今年の蚤の市は、クラスのみんなと協力をしたから、成功したのだと思います。中二のクラスのみんなで持ち寄った焼き菓子はかなり早く売り切れて、とても嬉しかったです。買ってくれる人を集めるために、声を出しながら食べ物や雑貨を売るのは大変だったけれど、蚤の市の売り上げは、慈善目的の寄付金になると知っていたので、それをモチベーションにして全力で売ろうと努力しました。
　蚤の市では、協力することの大切さと凄さを習いました。保護者のみなさん、先生や生徒みんなの協力のおかげで、蚤の市は成功しました。一人一人の努力が集結した結果として、多くの寄付金を集めることができました。来年も中三のクラスメイトと仲良く一緒に、チーム一丸となって、蚤の市を成功させたいと思います。





## 二回目ののみの市

中等部二年一組　モア　リリアン

今年ののみの市は、去年ののみの市より楽しかったです。中二は、ゲームとしてカップポングをすることにしました。ゲームの当番になった時、小さい子がいっぱい集まって来ました。自分でお金を持ち、ちゃんと代金を払える子供もいて、「すごいな～」と思いました。ボールがカップに入った時の子供の笑顔を見るのが心に残りました。去年は、かき氷を作るのが忙しかったので、ゲームの当番になる機会がありませんでした。そして、去年は初めてののみの市だったので、ゲームの当番になるのは、今年初めてでした。

クラスで何の食べ物を作るかを決めるのが難しかったし、他の学年にもうとられた食べ物もありました。最終的にベークトグッズにすると決めました。ベークトグッズと言えば、いろんな物があるので、最初はちょっとだけ心配でした。私はカップケーキを作る係になりました。カップケーキをつくったことがなかったので、少し緊張しました。ですから、のみの市の二日前、カップケーキを作る練習をしました。そして、練習した効果がよく出たと思います。なぜかと言うと、オーブンで焼いている時に、カップケーキが爆発したからです。母と相談し、インターネットで調べたら、いろんなことを学びました。一つは、材料が冷たすぎたことです。二つ目は、材料を混ぜすぎました。そして最後に、オーブンに入れる前は、ちゃんと材料を平べったくしないといけなかったことです。本番に来ると、カップケーキはちゃんと焼けていました。カップケーキを作るのが大変でしたが、去年のかき氷よりはすごく楽しかったです。

ベーク品は全部売れました。学校全体で九十六万円が集まりました。みんなが頑張ったかいがあって良かったです。来年も頑張りたいです。

## 課題の克服と目標の近づき

中等部三年一組　岩﨑　咲奈

私たち中三ののみの市の大きな課題は「とにかくクラスの人数が少ない」ということでした。今年は、少ない人数でどのように全てのブースを回すか、それが試されているようなのみの市でした。

今年もクラスで売る食べ物は、ポップコーンが選ばれました。去年と同じなのですが、大きな違いがあります。それは、今年は家でポップコーンを詰めることにしたことです。去年は、家ではポップコーンを作ってきただけで、カップに



詰める作業は会場でやりました。しかしその作業は人手が必要だし、大変だしで、大問題でした。

そこで、今年はポップコーンを家で詰めて、会場では売るだけにすることにしたのです。これによって会場での作業が減り、人手不足解消に繋がりました。また、先生方や保護者の方々にも私たち中三のブースを手伝っていただいたので、トラブルなくスムーズにのみの市を終えることができました。

人数の課題とは他に、私には個人的な目標がありました。それは、「積極的に売りにいく」ということです。去年、売り歩きをした際、恥ずかしくて声をかけられず全く売れませんでした。今でも思い出すととても悔しい思いが沸き上がります。今年こそは頑張りたくて、本番の前日、「やるぞ！」と気合いを入れてから寝ました。

しかし当日、実際に友達と売り歩きに行くことになった時、とても緊張してしまいました。先生方に買ってもらおうと職員室の前まで来たのはよいのですが、一歩がなかなか踏み出せなかったのです。入りたい、でも恥ずかしい、とおどおどしていたら、一人の先生が「入って大丈夫だよ」と背中を押してくれました。おかげで一歩を踏み出すことができ、物も売ることができたので本当に良かったです。まだまだ私が思い浮かべる姿からはほど遠いですが、確実に一歩近づいた気がした今年ののみの市でした。






## チーム中三の進化

中等部三年一組　　安立　宙陽

僕たち中三は、中高等部の中で一番人数が少ない。昨年もそうだったが、今年はさらに少ない七人で乗り切った。不安があったがやるしかなく、結果的には大成功だった。

少人数でも成功できたのは、まず、昨年とほぼ同じメンバーでお互いをよく知っていること、さらに昨年と同じ僕たちをよく知る担任の先生、そして、こちらもほぼ同じ保護者ボランティアの方々がとても協力的で息が合っていたからだと思う。僕たちも、保護者ボランティアの皆さんも少人数のため、交代や休憩することができず、最後までずっと働かなければならなかった。保護者の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいだ。

ベーク品を昨年と同じ二年連続ポップコーンにしたこともよかった。昨年は袋詰めにしなかったので床にこぼしたり、大量に売れ残ってしまった反省を生かし、今年は売り方を工





夫し、完売させた。ゲームの射的も併せて、少人数でも無駄なく効率的に動き、しっかりと結果を出せた。

やはりのみの市は、補習校で一番良い行事だと思う。現地校や地域でもボランティア活動はあるが、一番大きな違いは、補習校では集団で組織的また、国際的に行うことが特徴で、その評価は高い。準備から当日終わるまで本当に疲れるが、達成感があり気分がよくなり、また次回も参加したいという気持ちにさせられる。できれば僕たちの代表が、日本へ行って直接能登の小学校の皆さんに寄付金とメッセージを手渡し出来たらいいのにと思った。

## 頑張ったのみの市

高等部一年一組　粟飯原　ワイス　寿利

のみの市当日のクラスはその日の目標を決めました。高一で売り上げ８００ドルを達成することです。結果的に今年の、のみの市も大成功で、クラスで８００ドル以上を集めることもでき、とても嬉しかったです。しかし、ここまで来るための準備は結構大変でした。

元々、私たちはタンフルを作る予定でした。しかし、考えれば考えるほど、お金の問題や調理の難しさが明らかになりました。そこで、ハウエル先生が提案してくださったわらび餅に変更することになりました。タンフルより成功率がだいぶ高かったのですが、わらび餅も意外と難しいところがありました。バットの中で均等に伸ばしにくかったり、四角く切るのが難しかったりしました。試食用を作ることで改善点が分かって良かったです。他にもバットの大きさや材料の配布の仕方、ゲームのことでも本番直前に決まったことがいくつかありました。はじめはゆっくり準備をしていたので、保護者の方や先生を少し心配させてしまったと思います。皆さんの知恵と協力のおかげで最後は成功できました。

のみの市の日、一般客の時間になると、私のグループは第一回目のシフトがわらび餅でした。私は会計を担当していたのですが、お金を受け取って、おつりを計算して、それを教えて渡すのが、注文の数についていけませんでした。特に、箱の中のおつりが足りない時はもっと時間がかかって困りました。私のグループは一気に疲れてしまいましたが、わらび餅が人気だったのはとても良かったです。

最後の方がゲームコーナーにいたのですが、思った以上に私たちのゲーム「サッカー」は人気でした。並んでくれたのは小さい子が多かったのですが、自分の番を楽しみにしている姿はかわいらしく、サッカーをして喜んでいるところを見られて嬉しかったです。

バタバタした時もありましたが、皆の頑張りにおかげで今年ものみの市は無事終了しました。来年は準備などの責任も増えると思いますが、今回の経験を踏まえてよりよいのみの市にしたいです。

## 蚤の市の経験

高等部一年一組　永井　蓮

先週、学校全体で蚤の市がありました。僕はとても楽しみにしていましたが、同時に少し緊張もしていました。準備は大変でしたが、みんなで協力して進めたおかげで、なんとか当日を迎えることができました。

僕の最初の役割は、クラスの雑貨を売ることでした。最初はどうやってお客さんに声をかければいいのか全く分からず、特に幼児部の子たちにはどう接すればいいのか迷いました。小さい子どもたちは恥ずかしがり屋で、なかなか近寄ってくれませんでした。それでも、「こんにちは」と明るく声をかけたり、商品を見せたりするうちに、少しずつ慣れてきました。その結果、何人かの子が段々見にきてくれたり、物を買ってくれたり、サッカーを楽しんでくれたりしました。鬼のターゲットにシュートが入るたびに、子どもたちの笑顔を見るのがとても嬉しかったです。

その後、シフトが変わり、僕はわらび餅やベーク品を売る担当になりました。このコーナーでは、思った以上にお客さんが集まり、大繁盛でした。特にわらび餅は大人気で、どんどん売れていき、ついに全部売り切れてしまいました。

イベントが終わる頃には、みんな疲れ切っていましたが、最後に売り上げを確認すると、なんと去年より多くの収益がありました！これは僕たちの目標だったので、みんなで大歓声を上げて喜びました。蚤の市は楽しいだけでなく、忙しくて大変でしたが、クラス全員と協力しながら乗り越えたことが最高の思い出になりました。









# 補習校最後ののみの市

高等部二年一組　新木　太一修

昨年の高二の売り上げ目標を上回り過去最高額の売り上げを達成できた今年ののみの市。達成感と満足感で胸がいっぱいだ。何より、自分たちの手で最高のイベントを作り上げたことが何にも代えがたい誇りとなった。

小一の頃から、僕は毎年のみの市を楽しみにしてきた。ブースを回り、高校生たちが忙しく働いている姿を遠くから見たりするのが、子ども心にとても輝いて見えた。あの頃の僕にとって、高校二年生は大人のような存在で、手の届かない憧れだった。その高校生たちが「自分たちの力でイベントを作っている」と思うと、彼らが一層大きく見えたものだ。しかし、気づけばその憧れの存在が「僕自身」になっていた。「あんなに大きく見えた高二が僕になったのか」と思うと、時の流れの速さに驚かされる。十年以上にわたって見守ってきた舞台で、自分が中心となって動き回る日が来るなんて、夢のようだ。

今年の準備は大変だったが、その分やりがいも大きかった。特にクレープ販売の準備は忘れられない思い出だ。前日の夜、友達の家に集まり、三百枚ものクレープを焼き上げた。ホットプレートを囲み、手分けして生地を焼き、山のようなクレープが次々と積み上がっていく。失敗したり、ふざけあったりしながらも、みんなで力を合わせる時間は特別だった。「このメンバーでやり遂げたい」という気持ちが、より一層絆を深めてくれた。

当日、僕たちのブースにはたくさんのお客さんが訪れた。小さい子どもたちや保護者の方々が、クレープを手に笑顔を浮かべている姿を見るたびに、「この日のために準備してよかった」と心から思えた。売上が昨年を超えたことを知った瞬間、全員で喜び合ったあの光景は、一生忘れられないだろう。

「憧れの存在」だった高二が、今では僕自身。あの頃憧れたように、今度は僕たちが小さい子どもたちにとって「輝いて見える存在」であれたのだろうか。そう思うと、少し誇らしい気持ちにもなる。補習校最後ののみの市は、ただのイベントではなく、自分の成長を実感し、仲間との絆を深める大切な経験となった。この一日を胸に刻みながら、次のステップへと進んでいきたい。



## 補習校最後の蚤の市

高等部二年一組　東間　陽

蚤の市。それはとても特別なものです。中高等部が一丸となって行う大規模なイベントであり、新しい友達や新しい発見がたくさん見つけられる機会でもあります。何度かやったイベントではありますが、毎回新しい発見があって楽しかった記憶があります。そんな蚤の市も終わってしまいました。補習校の夏休み明けからクラス全員で毎週コツコツと様々な準備をしてきました。皆をまとめる人、ポスターを描く人、幼初等部のスタンプカードを作る人等々。適材適所といった感じで、皆それぞれ作業していました。

僕は幼初等部のスタンプカードを作りましたが、山のようなカードを見て、「これ全部セロハン貼って穴開けて紐結ぶって？」と驚いたことをよく覚えています。蚤の市前日には二階堂さんの家にお邪魔して、クレープを大量に作りました。みんなでわちゃわちゃしながらおそらく三百個作ったと思います。え？なんで作った量を覚えてないのかって？やってみな、飛ぶよ（記憶が）！クレープを作った後はみんなで外に出てバスケットボールをしたりして遊んでいました。二階堂さんの家は周りが暗かったので、星がよく見えました。

蚤の市当日、午前中は普通に授業があるため授業が始まる前に体育館のセットアップを行いました。授業の後にセットアップの続きを済ませた僕たちの元へ幼初等部がやってきました。どのクラスも幼初等部に来てもらう様に工夫を凝らした呼び込みをしていました。毎年幼初等部が来る時間帯は客取り合戦になっている気がします。その後の一般公開では人が多いので、客を取り合う必要は無くなります。僕はクレープを段ボールにいくつか入れて、体育館の外に売りに行きました。ここで蚤の市のベーク品が売りのこらないようにする小ネタを一つ。売り場でただ売るよりも自らほしい人がいそうな所に売りに行く方がよく売れます。食べ物系を体育館の外にいるお子さんを連れている保護者に売りに行きます。すると子供が欲しがるので親が買ってくれることが多いです。小さい子を連れた親は、あまり動くことができないのでただブースに置いているだけでは買えません。そういった人達に積極的に売りに行きましょう。

こんな感じで蚤の市は順調に進んでいって、無事に終わりました。達成感もありましたが、蚤の市が終わってしまった喪失感もありました。






985 PERSONS


985 PERSONS











